

北ボルネオの死の行軍

長崎県 本田実徳

何ごとのおわしますかは 知らねども

かたじけなさに 涙こぼるる

西行法師の歌ではありませんが、昼なお暗き杉の大木の下を、玉砂利を踏み締めて、内宮の拝殿へ進みますと、思わず涙が頬を濡らします。

日本人の心の故郷、伊勢の大神宮、五十鈴川で身と心も清め、父と共に参拝出来た喜びは言葉では云い尽くせない有り難さでした。

明日、広島の第一陸軍病院に衛生兵として入隊する私の武運長久を祈願するために、親戚や近所

の方々に見送られて、一足早く島原を出発した私には、生涯忘れ得ない伊勢神宮参拝でした。

私は島原市蛭子町で菓子製造販売業を営む本田南光堂の長男として、大正十（一九二一）年八月二十二日生を受けました。昭和十六（一九四一）年九月の徴兵検査で甲種合格となりました。一人息子の働き手が甲種合格となったことに両親も喜んでくれましたが、いざれ軍隊に入隊させねばならないと、思いは複雑な気持ちであつたろうと思います。

昭和十二年七月七日勃発した支那事変は日ごとに拡大し、支那大陸全土に広がり、連日のように先輩達が召集され、駅から港から出征していた時代ですから、我が家からも御国のために出征する

人が出ることは、家の誇りでもあり誉れでもありました。昭和十七年一月十日、広島市の広島城内の第一陸軍病院に入隊しました。その年の暮の十二月八日、ハワイ沖の空襲によって大東亜戦争の火蓋が切つて落とされました。緒戦の戦果に日本全土が喜びに満ち溢れておりましただけに、私共も希望に充ちた入隊でした。御国のために頑張るぞと心に誓いました。

入隊したその日、改めて身体検査が行われ、二人の者が不合格となり「即日帰郷」となりました。さだめし残念であつたろうと思いました。入隊して驚きましたことは、なんと島原から湊町の吉田栄、浜の川町の満尾秀一、宮の町の吉田重吉の三人も一緒に入隊しました。お互いにびっくりしながらも心強い思いがしました。

広島の陸軍病院は東京の第一陸軍病院の管轄になる病院と聞きました。私達はこの病院に二日いた後に宇品港へ移動を命ぜられ、輸送船に乗船させられました。百人ぐらいの人員でしたが、この

輸送船には、私達以外にも多くの兵隊が乗船しており、翌日朝鮮の釜山港に到着しました。上陸して直ちに防寒服が渡され着替えさせられました。これで行先は寒い所だなあと気がきました。

私達を乗せた軍用列車は京城（ソウル）から日本海側を走り、清津、図們經由で満州国に入りました。見渡す限り真白い雪の平原を北へ北へと走り、列車内で二泊して終点の東寧駅に到着しました。さすがに北満州は寒い。見渡す限り銀世界の中へ降りた私達は迎えのトラックに乗り、二十分ぐらいで部隊本部へ到着しました。

この部隊は満州第八百九十四部隊で、福岡の歩兵第二十四連隊で、近くに野砲第二百十二部隊の駐屯地も在りました。立派な建物の兵舎で、舎内にはペーチカが有つて温かくて助かりました。私達は衛生兵でしたから、訓練のためこの歩兵部隊に預けられたので、内務班も別で、教育隊だけの内務班でした。古兵から教えて貰いましたが、部隊の人員は召集兵とも合わせて約二千五百人の、

大きな部隊とのことでした。

初年兵の訓練も現役兵だけに厳しく毎日叩かれ叱られ、軍人勅諭、教育勅語、五ヶ条と一生懸命暗記させられました。夜の点呼の時に指名されてこれらが答えられないと「貴様」と怒鳴られると同時にピシヤリと叩かれ、よろよろすると「態度が何つとらん」とまた叩かれる。夜は叩かれることを覚悟せねばならないので、みんな一生懸命、死物狂いで覚えました。

外は寒いので肌着からすべて防寒用のシャツに、そして防寒服、防寒靴など帽子から足元までみんな防寒用のものを身につけての訓練が三カ月間、一期検閲まで行われました。一期検閲が終わりますと、私達は東寧の第二陸軍病院に勤務することになりました。この陸軍病院で八月まで各部隊から派遣された百人位が衛生兵としての教育を受け、基礎知識を習得してそれぞれの部隊に復帰しました。

私は第一陸軍病院に勤務することになり、よか

で家村部隊長の下二千百三十六人で編成が完了されました。

八月三日掖化出発、ハルピン、新京（長春）を経由して朝鮮半島を縦断、私達を乗せた軍用列車は八月八日釜山に到着、私達は国民学校で待機、その間、重機関銃班に所属して毎日訓練が実施されました。

八月二十三日釜山港を出発しましたが、門司港沖で停泊、付近には輸送船が多く停泊してありました。この頃アメリカの潜水艦の襲撃が頻繁に行われていたので、海上輸送が困難になっておりました。私達を乗せた輸送船は門司港から広島に移動して九月九日に広島に上陸し、軍が借用した旅館に分宿しました。人員が多いため風呂場が不足し、大衆浴場を借り切つて間に合わせる状況でした。

一週間待機後、上陸用舟艇に乘せられ、宇品港に待機中の戦艦「山城」と「扶桑」の二隻に乗り、九月十七日に宇品港を出港しました。輸送船では

つたと嬉しく思いました。第一陸軍病院には二百五十人位の入院患者がおり、この地区では一番大きい病院でしたから大変勉強になりました。勤務場所は菓の調剤室で、診断を受け持参した処方箋により薬を調合する仕事でした。やつと覚えた頃、炊事室への勤務交代を命ぜられ、炊事室の事務担当の仕事が一年近く勤めました。炊事の仕事は日本人軍属の方と満州人によって炊事一切が行われ、事務的なことは兵隊が扱って来ました。

この間、冬季演習にも参加しましたが私達衛生兵はトラックで運搬して来たテントの設営や、落伍した兵隊を看護するのが任務で、一般兵隊のように寒い思いはしませんでしたが、寒さのため凍傷になった兵隊がほとんどで落伍して凍傷の手当を受けていました。衛生兵の勤務中、七月になって二十人ぐらい掖河の第四百十四部隊に転属を命ぜられました。

この部隊は、台湾や千島に派遣され、わずかに残留者がいるだけでした。各部隊からの寄せ集め

目的地までは危険で到着出来ない、判断された結果の輸送方法だったでしょう。

満州を出発して四十四日を経て、やつと南方向け出発することが出来ました。戦艦二隻の両側には巡洋艦、駆逐艦が護衛しての物々しい出港でした。アメリカの潜水艦の襲撃を防ぐため、海上演習をしながら南下し、九月二十五日台湾沖を通りました。輸送船でないので私達は床にテントを敷いた上にごろ寝の毎日でしたが、船酔いする者が続出し、ほとんどの兵隊が食べては吐く状態で、その上甲板に急造された便所であったためよろよろしながらの便所通いで、みんなが苦労しました。後日分かったことですが、門司港沖に停泊していた輸送船十数隻は、ほとんど台湾沖でアメリカの潜水艦によって撃沈されたと聞きました。戦艦で輸送されたのは私達だけではなかったらうか、とも聞きました。

九月二十七日夕刻。ボルネオのブルネイ港に到着、夜闇に乗じて海軍の短艇数隻に分乗しラブア

ン島に上陸を敢行、内一隻が曲折しようとした時、横波を受けて転覆し、七人の犠牲者が出たのとことでした。到着して間もなく暗闇の中の出来ごとでした。

上陸した私達は大発による舟艇の準備と訓練が実施されました。

十月一日、英領北ボルネオの東北岸のサンダカンに進駐を命ぜられました。敵に発見されず果たしてサンダカンまで無事行けるのか心配しながらの敢行となりました。ラブアン島の沖にも十数隻の船が停泊しておりましたが、破損された船ばかりでした。幸い攻撃も受けず、部隊全員がサンダカンに到着しほつとしました。

サンダカンは木材の積出港で、立派な港のようでした。敵機が二、三回上空で旋回しておりまして。

夜中になって爆撃と銃撃をして来たため港内の船舶は被弾炎上し始め、その火の粉が陸上の弾薬や燃料、積載した食糧類に燃え広がることとなり、

アメリカ軍のレイテ島来襲により、戦争の様相が一変し、この島に駐留する必要がなくなり、ボルネオ本島に移動するようになりました。目の前にあるボルネオ島ではあるが、海上輸送は容易でなく、困っている時に駆逐艦と掃海艇が回航されまして、夜中にバトバト海岸より乗船し出発しました。

途中、島の沖合で我が方の軍艦が機先を制して艦砲射撃を浴びせ、風のごとく通過する場面もあって、目的地タワオには全員無事到着することが出来ました。

タワオは、ボルネオ本土の東海岸に所在する小さな港町で、日本軍の輸送兵站地でもあり、医療部隊も常駐していることから敵機が連日のように偵察に飛来しました。このことから「空襲近し」と予想され、防空壕の構築を第一とし、休養と食糧の補給は第二段と考え作業が進められました。

タワオに二個大隊が集結した後で、ボルネオ本土を横断して西海岸の軍司令部が所在しているアピ

被害はますます大きくなるばかり。我が軍には対空砲火もなく敵のなすままで、ただ右往左往するばかりでした。手の施しようがなく一回の空襲で港湾は灰墟と化してしまいました。無残な焼跡を見て兵器不足に涙が出ました。その矢先に部隊主力はタウイタウイ島に進発せよ、との命令が下り、第二大隊山本大隊を警備に残して、タウイタウイ島に移動することになりました。

しかし船がないので、敵の目標となることを避けて大発に分乗して移動することにしました。心配が適中して渡海中、敵機に発見されましたが、急ぎアンペラの下に潜らせ、二、三人の兵隊が裸になって敵機に手を振らせまずと、攻撃せずそのまま飛び去ったのでほつとしました。

タウイタウイ島には少数の海軍部隊の人員と連絡用小型飛行機が一機残っておりまして。度々敵機が低空で飛来し、搭乗員の姿が分かる位の高さまで降下してきます。その度に用意されている蛸壺防空壕に逃げ込みました。

一の防御に任ずるよう命令され、既に部隊長は島田中尉と共に、飛行機で出発されておりました。タワオからアピーまでの行程は約六百キロのことでした。

説明によりますと、作戦地は赤道直下の高温多湿の地で、ジャングル有り湿地帯有り大河有り、その上高い山岳有りということで、食糧、弾薬、通信器材などをどのように運搬するか、大河をどのようにして渡河するかなどの難問題を抱えながらも強行突破しなければならぬという重大使命を背負い、二月十八日未明タワオを出発しました。これが死の行軍の始まりでした。

出発して間もなく、後方に物凄い轟音が相次ぐので行進を止め、二、三人の者が山腹に登って遠望するとタワオの街は大空襲を受けている模様との報告で、残っている部隊の安否が心配になりました。

やがて敵機の去りゆくのを確かめて前進しましたが、早く出発してよかったと思いました。太陽

が昇りはじめてから暑さは増し、背中の荷物を重く感じるようになりました。このままでは目的地までは無理と判断され、そこで各人の装備を再点検し、必要最小限の携行品以外は捨てさせられました。

アパス、バロンで野営し、タワオより約八十キロ隔てたモステンに着いた頃は落伍者が増え、一日休養をとり体力を回復させると共に後続者を待ちました。そこには日本人も少し居住していたので、携行出来ないと判断された兵器資材をここに残し、後続の人達に渡して下さるようお願いして出発しました。

ラバットに向かうためには海上を舟で渡る必要がありますでしたが、船舶工兵が操縦する舟艇によって暗夜を利用して渡航を敢行、折よく波静かで夜明け前にラハダットに接岸することが出来てほっとしました。情報によると、敵は我が軍の行動を察知してか上空を偵察中とのことで、隊列を数班に分けて行動することになりました。ラハダット

した。みんなで分けて食べました。

第一難関を突破したという安心感からか、多数の歩行出来ない人達が続出し、この兵隊を残さねばならなくなりました。悲しいことでした。この地に残すことは死を意味することで残念でしたが、先を急ぐので止むを得ない処置でした。

コヤ川は川幅が百数十メートルもあって渡河が大変でしたが、幸いにも渡河のために連絡員が準備してくれた丸木舟二隻に五人ずつ乗って渡るの一日かかりました。やっと川を渡ったと思ったら道らしい道がなく、昼なお暗いジャングルの中を潜り、伐採しながら進むという困難な道程でした。

足もとに注意しながら進むと方向が分からなくなるし、滞水地では深い所にはまり込むと身長を没すような深さで、樹木を切り倒しその上を猿のようにして渡るなど、一日の歩みは六キロにもならないほどの進み方でした。泥水の中の行軍では軍靴も地下足袋も役に立たないので、樹の皮や

とセガマの間には日本人の移民が散在していて、気分的に楽でした。

日本人の情報によりますと、この先六十キロの地点は原地人も未踏の地で、食糧の補給も不可能であるとのことで、不安の中セガマを出発しました。セガマを出てから二キロ位で路跡が消えてしまいました。これは困ったと思い、聞こうにも人はいないし暗夜の中を歩くのと同様、感と磁石と時計が頼りでした。夜になると落伍者のことも考えて休息せねばならず、予定の日程は一向に進むことが出来ませんでした。

「コヤ河まで頑張れ」の合言葉で人跡未踏の地、野獣も通わぬ数十キロを忍耐力と戦友愛で進み、コヤ河畔にたどり着いたのは、セガマを出てから七日目でした。一日の行程はわずか十キロ余りの難行軍でした。コヤ河は北ボルネオの大河でサンダカン方向の海上より舟で登って来てくれた連絡員が、わずかばかりの芻と現地芋を集めておいて下さり、地獄で仏に会った思いで有り難く思いま

野草を利用して即製の草鞋を利用しましたが半日ともたない。その上山蛭のようなものが首筋や胸や足に食いついて血を吸う。これを取るのに一苦労。その痕が化膿する。蚊から食われてマラリヤ病が発生する。疲労がますます加わり落伍者は増加するばかりで、涙を流しながら別れねばなりませんでした。

コヤ川には至る所に支流があつて、これを渡るために大きな樹を切り倒して渡らねばならないので、鋸では間に合わないため、貴重な弾薬を使用しました。マラリヤ病を防ぐため「キニーネ」を所持しますが、水で飲まねば胃を悪くするので、その水を探すのも一苦労で、あちこち探し当てても赤黒い泥水ばかり。口に入れる物もない。ジャングルまたジャングル、腰から胸あたりまでの泥水の中の行軍で、まさに死の行軍です。

マラリヤの高熱で歩けず倒れる戦友、助けようにも自分自身がふらふらとしていて助けることも出来ない。薬があれば、食べ物があれば、水があ

ればと思いつつ手の施しようがなく、みすみす戦友を見殺しする非情な状態でした。

書けばきりがありません。筆舌に尽くし難い苦難の死の行軍でした。百四十人が四十人になり、三月二十八日、アピーに到着、実に四十日間の行軍で、到着した時の姿は日本軍の精銳の姿ではありませんでしたと、窪田連隊副官は語り、痛々しい病人の姿さながらでしたと付言されました。

宇品を出発した時の二千二百二十人が、戦死者八十三人、戦病死者千百人、ほとんどが死の行軍での死者だと云われております。

数班に別れて行軍を続けて、アピーに集結してはいますが、その行程の苦労はほどほどで、班によって違い食糧が無く、蛇やとかげ等食べられる物はなんでも食べた班もあったようです。私達は大きな体をした豪州兵と直接戦火を交えたことは有りませんでした。山奥をさ迷い続け、終戦を知ったのは九月中旬でした。

聞きますと八月十六日米軍機からビラが撒かれ、

した。来る時は戦艦「山城」と「扶桑」に乗って送られた私達でしたが、帰りはほとんどジャングルの中の死の行軍によって死亡された千二百人の戦没者の方々と帰るといふことに憐れな帰国でした。

昭和二十一年四月十三日、広島県大竹港に到着、一泊の上、軍服上下一着と旅費百五十円を受領し、それぞれ故郷に帰って行きました。大竹駅では、海外からの引揚者とも一緒に列車は大混雑でした。四月十六日夕方、やっと島原にたどり着きました。島原湊駅から自宅まで飛ぶように帰った私の、五〇キロにまで瘦せた姿を見た両親は、涙を流して無事の帰宅を喜んでくれました。

仏壇に無事の帰国を報告しますと同時に、死の行軍のことを思い起し、二度と戦争があつてはならないと誓いました。そしてはるか伊勢神宮の方を向いて、ご守護下さったことに手を合わせました。

終戦時のボルネオの兵力は二万九千五百人、戦

その中に広島と長崎に原爆が投下されたこと、戦争は終了したから投降せよと記載されてあったとか、そして皆信用しなかつたとも語っていました。部隊本部との合流もまちまちで、遅い中隊は十一月に合流し、私達がビツセルトン収容所に收容されたのは十二月に入ってからで、早い人達は三月月ぐらい前から收容され、毎日雑役に従事していたとのことでした。

食事は三度三度食べさせては頂ましたが、米はどこにあるかと思うような粗末な雑炊で、疲労を回復することはできませんでした。時には缶詰がでましたが、豪州兵の一日分を三日で食べねばならず、残りを隠しておきますと、盗まれて大騒ぎしたこともありました。収容所の中では今、日本はどんな状態になっているのか、長崎出身者は原爆投下で家も何も無くなっているだろうとの話で不安は隠しきれないようでした。

昭和二十一年三月二十九日、家村部隊八百人(戦没者千二百人)は貨物船に乗船しアピを出発しま

没者一万八千柱、復員者一万四千五百人と後日ボルネオ島での激戦を知りました。今日なお当時の悲惨さは忘れることは出来ません。死亡された方々のご冥福を心よりお祈りしております。